

2002年のマレーシア研究 ——「領有」が問うもの——

井口由布*

最近のマレーシア研究におけるアイデンティティ形成にかんする議論のひとつの傾向として、「領有 (appropriation)」への関心というものがあるのではないだろうか。領有とは、「すでに存在する諸表象のなかからつごうのよいものを選択的にえらびとりみずからのものとすることによって、あらたな文化的主体を構築していく作業」(林 2001: 27)である。

エドワード・サイードの『オリエンタリズム』やベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』以来、アイデンティティを本質主義的にみなそうとすることにたいする批判が共有されるようになり、植民地主義やヨーロッパ中心主義などを参照するなかで「構築」「創造」されるものとしてアイデンティティが考えられるようになっていく。それでは植民地におけるアイデンティティの形成とは、植民地主義的な認識枠組みを一方的に受容する過程として読むべきなのだろうか。ここにおいて登場するのが領有という問題領域であろう。

左右田直規による英語の研究内容紹介“Indigenizing Colonial Knowledge: The Formation of Malay Identity in British Malaya”は、植民地のアイデンティティ形成における「領有」の問題を提出しているものである。左右田は、植民地におけるアイデンティティが、植民地主義的な知の枠組みを不可避免的に参照し

つつ形成されることを、人種概念、マラヤやマレー諸島といった空間認識、さらには時間が過去から現在、未来へと線状にすすんでいるという時間概念(これなしには通史の叙述は不可能である)などの認識方法の成立とのかかわりで指摘している。くわえて、植民地におけるアイデンティティの形成が、植民地主義的な認識枠組みの一方的受容によってなされるのではなく、みずからのものとしていく過程であることを、イブラヒム・ヤーコブのムラユ・ラヤ構想などに着目しながら述べている。

左右田は、別の場所でじしんが述べているように、社会構成主義的立場をとっているはずであるが、植民地マラヤにおけるマレー・アイデンティティを「外的なる知の権力と内的なる知の権力の相互作用の結果」であるとするとき、相互作用に先んじて内と外をあらかじめ設定しているようにみえる。これは、本質主義に対抗する構築主義的立場とは反して、アイデンティティの構築にあらかじめ核のようなものや重層低音のようなものがあるとする議論をさえ導いてしまうことがあるのではないだろうか。この核のようなものとは、吉野耕作がアンソニー・スミスをひいて説明する近代的ネーションの原型、「エスニー」にあたるだろうか。

吉野は「エスニズムとマルチエスニティー

* 東京外国語大学大学院

—マレーシアにおけるナショナリズムの2つの方向性——」において、ネーションにかんして、アンダーソンやゲルナーなどネーションを近代化の産物とする近代主義(近代化論ではない)と、アンソニー・スミスの「エスニー」のような近代的ネーションの原型なるものを想定する歴史主義という2つの理論があることを指摘している。吉野は、「エスニー」もネーションに付随して近代において構築されたとみるべきであるとし、その意味では、かれの立場とは、かれのいうところの近代主義であるといえるだろう。

吉野によれば、近代の産物としてのエスニシティ、ネーションの形成過程は、マレーシアにおいては一方で同化主義的国民文化として、他方に多文化主義的国民文化としてあらわれているという。おそらくは、マレーシアなるものの「創造」「構築」は、これらの構想の絶え間ない衝突と合意の過程においてなされるものであろう。すなわちこの折衝は、基本的には、ネーションという枠組みを前提にしつつそれを補強するものである。だが、吉野によれば、この折衝の過程には、ネーションの境界を越えるマルチカルチュラリズム、吉野のいう「トランスナショナルな多文化主義言説」なるものが存在しているという。ここで吉野は、イスラムと儒教を「アジア的なるもの」として読みこもうとする動き、アジアにおける多様性と根底における共通性という言説について言及している。たしかに、このようなアジア的なるものにかんする言説は、既存のネーションの空間的枠組みを越えようとするものである。しかしながら、ネーション的思考の枠組みを越えているかといえ、そうであるとはいえないだろう。むしろこれは、ヨーロッパ

によってまなざされた「アジア的なるもの」の「領有」であり、ネーションの拡大であるといえるのではないだろうか。

「領有」ということばこそ使用してはいないが、山本博之の「カダザン人のナショナリズムとエスニシティ——英領北ボルネオ(サバ)における収穫祭の成立——」も、植民地におけるアイデンティティ形成における「領有」的問題を論じているといえるだろう。フーコーに触発されて展開された吉見俊哉の『博覧会の政治学』をむすびにひきつつ、山本は、北ボルネオの人々がヨーロッパ近代のまなざしのなかでみずからのアイデンティティを獲得していったことを述べている。山本の着目する北ボルネオの収穫祭は、イギリスによって「創られた伝統」であるという。山本は、収穫祭が本来的なものではなく虚構であるということを指摘するのが論文の目的なのではなく、人々が「創られた伝統」をいかにみずからのものとしていったかを探ることにこそ力点があるのだという。それは、山本によれば「イギリス人が持ちこんだ諸制度を利用して」新しい文化的主体を作成しようとする作業であった。

奥村みさ「民族衣装にみるマレー文化の新伝統主義——マレー語女性誌『ジェリタ(Jelita)』を中心に——」も、「創られた伝統」に着目する論考である。奥村は、マレー文化を中心としたマレーシア文化が政府の主導でつくられるなかで、マレー文化も創造されていることを、マレー人女性の服装の保守化傾向をとりあげて論じている。マレーシアにおいては、1980年代後半の経済成長と反比例するように、マレー人女性が伝統的な服装を「自主的に選択する」傾向があること

が指摘されている。奥村は、マレー人女性が伝統的な服装を選択することは、エスニック・グループへの帰属意識の強さを象徴していることであるという。また、マレーシアにおける「伝統の創造」の背景として指摘されているのは、「自国の文化的アイデンティティを国際社会のなかで確立し、かつ他の国々にも尊敬できるものとして認識される」ことが、「発展途上国が、ある程度の経済的・技術的地位を国際社会で得ることと表裏一体となって」国際社会によって要請されていることである。奥村のいう「国際社会」の要請を、左右田や山本のいうような西洋近代による命令系と重ね合わせて考えることもできるかもしれない。

このような方向性からならば、植民地におけるアイデンティティの獲得の過程が、内なる他者を生みだしかつ抑圧することで行われていくということの問題化していく可能性もでてきたのではないだろうか。すなわち、領有されたアイデンティティが植民地主義と共犯関係にあることが、男性中心主義を介して明らかになる可能性である。しかし残念ながら、奥村は女性の伝統的な服装の問題を、伝統的マレー様式をデザインにとりいれた建築物や、民族舞踊の新しい振り付けなどと同様に「伝統の創出」としてのみ論じており、なぜ男性ではなく女性が伝統をになうのか、しかも奥村自身が述べるようになぜ女性がみずからすすんで伝統的なものを選択するのかについて問わないことで、上記のような可能性をみずから封じてしまったといえよう。

マレーシアにおけるアイデンティティの形成についての最近の諸議論では、これまで見てきたように「領有」という問題領域への関心の高さがう

かがえるものの、折衝のなされる空間、メアリー・ルイーザ・プラットのことばでいうならば「接触領域」への関心が低いようである。「接触領域」とは文化的差異が文化的種差へと変換される場であり、「支配と従属からなるきわめて非対称の諸関係のなかでまったく異なる複数の文化が出会い、衝突し、たがいをつかみあう社会的な諸空間である」(Pratt 1992:4)¹。接触以前には「文化」は分節化されず、内と外も創出されない。林みどりによれば、接触領域という概念によって、「ヨーロッパ人やアメリカ合衆国人、ラテンアメリカやアフリカの現地支配層が書いたテキストを、被支配的な層への権力拡大のプロセスのあらわれとしてとらえるだけでなく、言説をつうじての権力の行使にたいする従属的＝周縁的な側の反抗的な応答を、同時にそこに読みとることを可能にする」(林 2001:9-10)という。植民地主義を領有することで形成された国民主義が、植民地主義と共犯関係にあることを考えるとき、「接触領域」という概念は、植民地主義への対抗をどのように考えるかについて大きな示唆を与えてくれるだろう。

参考文献

Pratt, Mary Louise, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (London, New York: Routledge, 1992).

林みどり『接触と領有——ラテンアメリカにおける言説の政治——』(未来社、2001年)。

¹ 翻訳は林(2001)による。